



Title	世代性(Generativity)の概念と尺度の変遷
Author(s)	田淵, 恵
Citation	生老病死の行動科学. 2010, 15, p. 13-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11102
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

世代性 (Generativity) の概念と尺度の変遷

A review of the transition of ‘Generativity’ concepts and scales

(大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程) 田 渕 恵

Abstract

This review focused on the transition of the concepts and scales of “generativity,” a psychosocial developmental task in middle age. In early times, Erikson (1963) introduced generativity with a focus on the “generative concern” as a parent. Moreover, later, he redefined it in the broader sense of the term, including “creativity.” Subsequent to his studies, in the 1980s, some generativity scales focused on the concern as a parent were constructed and adopted. In 1992, McAdams & Aubin introduced the five aspects of generativity, including both “generative concern” as a parent and creativity, and constructed the “Loyola Generativity Scale (LGS).” In Japan, Marushima (2007) introduced the Japanese generative concern scale, which focused on “creativity.”

Key word: Generativity, definition, generative concern as a parent, creativity

I はじめに

中年期以降になると、家庭内での子育てや職場での部下の指導などを通して、次世代を担う若い世代への関心が高まると言われている。こうした関心を、Erikson (1950) は「Generativity」と名付け、中年期の心理社会的発達課題とした。長寿化や晩婚化等の社会的背景の変化に伴い、「Generativity」は中年期のみならず、高齢期においても重要な発達課題となっていることが近年指摘されている (Cheng, 2009)。「Generativity」は、Eriksonの造語である。Eriksonは「Generativity」を、「次世代を導き、確立することへの関心 (英語)」と第一義的に定義し、第7段階の発達課題として位置づけた (Erikson, 1950)。「generate」はラテン語源で「生み出す」という意味であり、「generation」は「世代」、「generative」には「生殖」という訳語が用いられている。わが国での「Generativity」研究の初期段階においては、こうした語源と第一義的な定義を重視した見解から、「生殖性」という訳語が多く用いられてきた。後にEriksonは新たな概念を加え、「Generativity」を「自分自身の更なる同一性の開発に関わる一種の自己-生殖も含めて新しい存在や新しい製作物や新しい概念を生み出すこと」(Erikson, 1982)と再定義した。わが国では、1984年に発行された「自我同一性研究の展望」(鏑・山本・宮下, 1984)の中で、「Generativity」が生殖のみを指す概念ではなく、広く次世代を育て世話するという概念を含むものとする立場から、「世代性」という訳語が用いられ、今日での「Generativity」研究で用いられている (丸島・有光, 2007)。本論では生殖のみに囚われない概念として、「世代性」という用語を採用することとする。

Eriksonによるこうした定義と解釈の変化が、後の「世代性」研究において重要な議題となっている。青年期以前までの発達課題における研究と比較し、中年期以降の研究はその蓄積も少ないが、その中で「世代性」の多義的な概念について様々な解釈と議論がなされてき

た。

「世代性」概念の発生と変化、そして収斂に向かう議論の流れを集約することは、今後の「世代性」研究の基礎的資料となるものであると考える。そこで本論では、欧米やわが国において、「世代性」を論じる上で重要な幾つかの文献を取りあげ、その概念と、概念を測定するための尺度の変遷について述べる。

II 世代性の概念と尺度の変遷

1 Eriksonと世代性

「世代性」概念について整理する際には、まずEriksonがその著書の中で概念をいかに用いてきたかということに焦点を当てることが重要である。Eriksonはその生涯で多数の著書を残し、その中で「世代性」についても幾つかの記述を残している。1950年代にEriksonが「世代性」理論を展開した後、多くの研究者がその理論を議論、検討してきたが、上述したようにErikson自身も自らの理論について様々な説明を補充し、「世代性」の定義を変化させている。

1950年代から60年代にかけて、EriksonはFreudの心理学的理論の脱性化の立場から「世代性」概念を提唱した。「世代性」の概念として、「親であること」を第一義的定義として重視した。しかし、男女間の性的関係の帰結としての生殖という意味のみではなく、異性の相手との親密な出会いを鍵として、そこから「生み出すこと」全般について意味する、としている（Erikson, 1950）。そして60年代前半には、「世代性」に異世代間の「相互性（mutuality）」の視点を導入し、先行世代と次世代との相互関係、相互作用の中で、「世代性」の発達が達成されるとした。「世代性」の定義も拡大し、次世代に対して「教えること」や、組織の中で知識や技能を次世代に伝達することが「世代性」の行為として含まれるようになった（柳沢, 1985）。また、「世代性」と前段階までの発達課題との関連について言及し、「世代性」の発達には乳児期で獲得されるべき「基本的信頼感」が重要であるとした。更に60年代後半では、「世代性」が社会の中での儀式や制度に支えられ、強化されていくものであることを提唱している（Erikson, 1968）。以上のように、1950年代・60年代は、世代間において様々な経験を継承していくことが、両世代にとって「良いこと」であるという前提の中で、「世代性」の議論が進められてきた。「世代性」のネガティブな側面に初めて触れられたのは、1969年に出版された『Gandhi's Truth』（Erikson, 1969）である。Eriksonは著書の中で、「負の遺産」が世代継承されることで、悪循環としての「世代性」が成立する可能性について触れている。こうした「世代性」の暗部については、後にKotre（1984）が「世代性」研究の中で独自の理論を展開している。

「世代性」がより多義的な概念となったのは、1970年代から80年代以降にかけてである。Eriksonは著書の中で、「自己探求・創造性」といった新しい要素を「世代性」概念に加えた。初期段階では、「世代性」の前段階の発達課題である「親密性」との関連から述べられていたが、この時期には次段階の発達課題である「統合」との関連から述べられるようになった。彼は、次世代との関係や、自分がこれまで行ってきたこと、生み出してきたことへの回顧と、新たな自己探求が相互に関連しあいながら、「世代性」が達成されていくことを述べている（Erikson, 1982）。そして、「祖父母的世代性の能力は、現在の世話を、未来への関心—すなわち今日の若い世代の未来、…そして世界全体としての存続への関心に結

びつける。これは、人生の終わりが近づく時の絶望感を乗り越えようと努力する時に重要となる不死の感覚を得るのに役立つ。(Erikson, 1986 朝長・朝長訳 1990)」と述べ、先に訪れる「死」の受容につながるものとしての「世代性」の重要性を主張している (Wakefield, 1990)。

このように、提唱された初期には親としての「生殖」を核としていた「世代性」の概念は、Erikson自身の中でも次第に広がりを見せ、晩年により広義なものとして再定義されるという変遷を遂げている。

2 McAdams & Aubinの「世代性」研究

Erikson以降の「世代性」研究では、第一義的定義が重視されることが多く、そのため「生殖性」という狭義の概念として論じられることが多かった。「世代性」発達の個人差を測定するために作成された幾つかの尺度についても、第一義的定義に沿った内容の項目が多い。

例えば、Eriksonの定式化した8つの心理社会的段階に応じた発達課題の達成度を測定評価し、個人の同一性感覚のレベルを明らかにするためにRosenthal, Gurney & Moore (1981)により作成された、Erikson心理社会的段階目録検査 (Erikson psychosocial stage inventory) では、第7段階のgenerativityを測定する尺度として、「私は、未来を担う子どもたちを育てていきたいと思う」といった第一義的定義を採用した内容を中心に構成されている。また、Eriksonの発達課題の評価を目的として作成されたOchse & Plug (1986)の「Erikson and Social-Desirability Items」では、第7段階の「Generativity Versus Stagnation」を測定する尺度として、「幼い子どもたちの世話をすることは楽しい」や「若い人々を導くことは楽しい」といった次世代への世話についての内容と、「自分の死後に残せるものが何もないと感じる (逆転項目)」や「永続的に価値のあることをしている」といった、創造的な営みを通して次世代に遺産を残すことへの関心についての内容が含まれている。

こうした流れの中、Eriksonの定義を再度詳細に検討し、その概念を整理することで後の「世代性」研究に多大な影響を与えたのは、McAdams & Aubin (1992)である。彼らは、Eriksonの文献を詳細に検討し、7つの心理社会的要素を用いて「世代性概念構成図」(図1)を作成した。この概念モデルによると、まず世代性の動機付けとして、内的希求 (inner desire) と文化的要請 (cultural demand) の2局面が存在する。前者は、「永続的な個としての実現を希求すること」といった個人の内面を突き動かす強い希求性を意味し、後者は各々特定の文化において、個人が期待される社会貢献や社会的責任を果たそうとする動機を表す。これらに動機付けられ、成人個人は「世代性の関心 (concern)」が喚起させられる。そしてこうした関心が、人間として受け継がれてきた規範としての「信念 (belief)」や、「世代性」の具体的な取組みに影響し、行動 (action) へと導く。そして、最終的にはそれら一連の流れについて内省し、物語ることで、「世代性」を個人の中で意味づける。McAdamsらは、この概念モデルを用いて、Eriksonが著書の中で定義づけた「世代性」の概念を、より整合性を持った理論として確立させることを試みたのである。

概念の整理を行った後、McAdamsらは世代性の関心および行動について、その個人差を測定するため、妥当性と信頼性のある尺度の作成を試みた。彼らはErikson以降の文

献を整理する中で、「世代性」の関心について5つの下位領域が存在することを明らかにし、それぞれに対応する項目を作成することを試みた。5つの領域とは、次世代を担う若年世代を世話することへの責任を感じる「次世代の世話と責任 (caring for and taking responsibility for other people)」、自分の住む地域や近所の人に貢献しようとする「コミュニティや隣人への貢献 (concern making significant contributions for the betterment of one's community, neighborhood, and so on)」、次世代に自身の持っている技術や知識を伝えていくことへの関心である「次世代のための知識や技能の伝達 (concern passing on knowledge, skills, and so on, to others, especially to the next generation)」、次世代のためになるものを自身の死後も残したいという「永く記憶に残る貢献・遺産 (concern doing things that will be remembered for a long time, will have a lasting impact, and will leave an enduring legacy)」、そして新たなものを作り出すことへの意欲である「創造性・生産性」である。彼らの作成した「Loyola Generativity Scale (LGS)」は、「次世代の世話と責任」4項目、「コミュニティや隣人への貢献」4項目、「次世代のための知識や技能の伝達」4項目、「永く記憶に残る貢献・遺産」6項目、「創造性・生産性 (being creative and productive)」2項目の20項目から成り、妥当性・信頼性共に高い尺度であることが示されている (McAdams & Aubin, 1992)。

今日の欧米における「世代性」研究は、多くがこのLGSを用いて世代性を測定している (e.g. Pratt, Danson, Arnold, Norris, & Filyer, 2001; Stewart, Ostrove, & Helson, 2001)。LGS尺度の開発後、向社会的行動における研究 (e.g. Peterson & Klohnen, 1995) や養育態度研究 (Peterson, Smirles, & Wentworth, 1997) などにおいても新たに「世代性」の概念が用いられるようになり、「世代性」研究は大きく躍進したといえる。

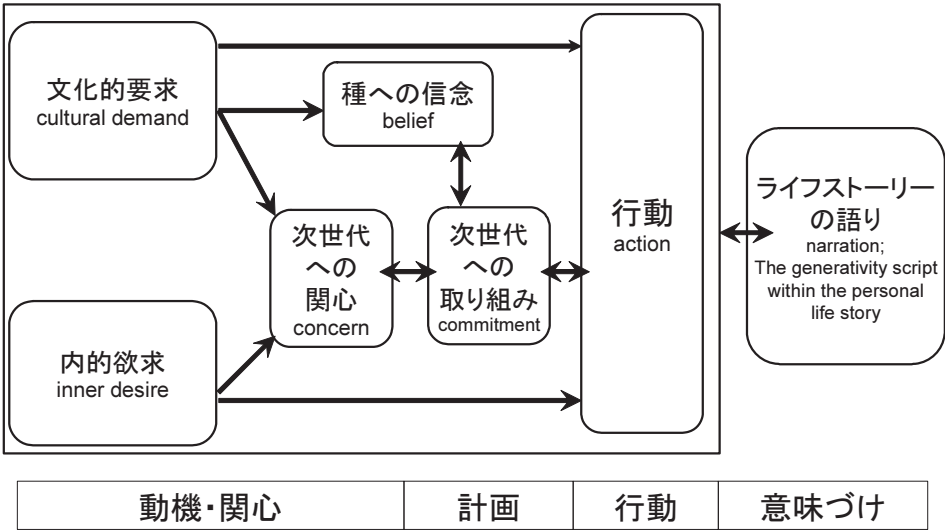


図1 「世代性」概念構成図 (McAdams & de St. Aubin, 1998より作成)
 出典: McAdams, D. P., & de St. Aubin, E. (Eds.) (1998). *Generativity and Adult Development*. American Psychological Association. Wasington, D. C., p.9

3 McAdams以降の「世代性」研究

McAdams & Aubin (1992) 以降、「世代性」の概念について新たな理論を展開させたのは、Bradley & Marcia (1998) である。Bradley & Marcia (1998) は、「世代性」概念を2つの規準によって整理し、中高年者を区分する5つのタイプを設定した。1つ目の規準は、「個性性」と「関係性」である。「個性性」とは「個としての実現」であり、「世代性」の意識や態度が自己に傾倒している側面である。一方「関係性」は、「世代性」の意識や態度が他者に向いている側面である。2つ目の規準は、「世代性」の関心と行動である。これら2つの規準によって、Bradley & Marcia (1998) は5つのタイプを仮定し、表1のように表した。「停滞性タイプ」は、自己に対しても他者に対しても、「世代性」の関心も行動も低いタイプである。「紋切り型・非個性型」は、自己・他者双方に対して「世代性」の関心は高いが、それが行動に移行しないタイプである。「関係性タイプ」は、関心においても行動においても、他者に傾倒するタイプであり、他者から必要とされることへの強い希求性を示すタイプである。反対に「個性性タイプ」は、自己に対しての関心・行動が高く、他者への働きかけが少ないタイプである。そして「世代性」タイプは、自己・他者双方に対して、関心も行動も高いタイプである。Bradleyはこれらのタイプ判別のための方法論として、「半構造化世代性面接法」を開発し、その信頼性・妥当性を報告している。「半構造化世代性面接法」では、仕事・地域社会・家族・個人的関心の各領域について、インタビューにより詳細な情報を得、それらの質的データを5つのタイプの判定基準に従って正確に分類し、得点化する。「世代性」を中高年者の「語り」から分析するこの手法は、後の、質的なアプローチを重視した「世代性」研究に影響を与えた。

表1 Bradley & Marcia (1998) による「世代性」の5タイプ

タイプ	関心		行動	
	自己	他者	自己	他者
世代性(Generative)	High	High	High	High
個性性(Agentic)	High	Low	High	Low
関係性(Communal)	Low	High	Low	High
紋切り型、非個性型(Conventional)	High	High	Low	Low
停滞性(Stagnant)	Low	Low	Low	Low

出典：Bradley, C. L. & Marcia, J. E. (1998). Generativity-Stagnation: A five-category model. *Journal of Personality*, 66, 39-64.

4 わが国における「世代性」研究と尺度

わが国における「世代性」研究は欧米のものと比べて非常に少なく、その多義的な概念の収斂に向けた議論や理論の検証はほとんどなされてこなかった。日本語によるEriksonの文献では、ほとんど「Generativity」は「生殖性」という訳語が用いられ、Eriksonの第一義的定義から概念的な発展は認められなかった。McAdams & Aubin (1992) の「LGS」開発後、欧米の研究において「世代性」研究が増加すると、ようやくわが国においても「世代性」研究が報告されるようになる。

丸島 (2000) は、中年期の自己概念や人格発達の側面から「世代性」に着目し、中年期に

における「世代性」が後の高齢期につながるものとして重要な人格発達であることを報告している。その後、丸島（2005）は、McAdams & Aubin（1992）による「世代性」の概念モデルとLGSを基に、日本語版世代性関心尺度の作成を試みている。丸島（2005）は、LGS20項目に対して、3人の心理学者による議論を通して翻訳を行い、文化的要因から違和感のある表現の修正を試み、最終的な翻案を作成した。作成した翻案について30代から70代までの中高年者を対象に調査を行い、探索的因子分析を行った結果、「世話」（3項目）、「世代継承性」（4項目）、「創造性」（5項目）の3因子構造が明らかとなった。この尺度について信頼性と妥当性の検討を行ったところ、内的整合性が低く、一部妥当性が認められないといった問題が残された。これについて丸島（2005）は、米国文化に基づく項目を翻訳したことにより内容的妥当性が欠如していたとし、わが国の文化により即した内容を盛り込むことを目指して、改訂版世代性関心尺度の作成を行った（丸島・有光, 2007）。丸島・有光（2007）は、成人発達論における先行研究を参考に日本の文化的背景を念頭において項目を追加し、20代から80代までの成人を対象に調査を行い、探索的因子分析を行った。その結果、丸島（2005）と同様、「世話」（7項目）、「世代継承性」（5項目）、「創造性」（8項目）の3因子構造が明らかとなり、更に併存的妥当性および収束的妥当性が示された。最終的な尺度の項目内容は、「私は変わったことやめずらしいことをするのが好きだ（創造性）」、「困っている人を見ると、つい手助けがしたくなる（世話）」、「私は自分の死後に残るようなことは何もしていないと思う（世代継承性）」等であった。

わが国における「世代性」研究では、この丸島（2007）の改訂版世代性関心尺度を用いた研究がいくつか存在する。例えば堀毛（2008）は、丸島（2007）の尺度を用いて日本人中高年者の世代性を測定し、中年期よりも高齢期により世代性が高くなることを報告している。この改訂版世代性関心尺度の内容は、McAdams & Aubin（1992）の「LGS」を基とはしているものの、半数以上の項目がオリジナルなものとなっており、特に「創造性」の項目は数も多く、強調された尺度内容となっている。McAdams & Aubin（1992）以前の研究ではEriksonの第一義的定義のみが取り上げられ尺度化され、わが国においてもそれらの訳語として「生殖性」を強調した尺度しか存在しなかった（ex. 佐方・中西, 1983）ことが問題であったが、丸島（2007）の尺度では「創造性」の概念を含むEriksonの再定義を重視した尺度となっている。このように、「世代性」の尺度研究では、狭義の概念を採用した内容のものから、わが国においてより広義の概念を採用したものへと変遷しているといえる。McAdams & Aubin（1992）による概念整理の段階では、構成概念の一部であった「創造性」が、丸島（2007）の尺度においては中核的な位置を占めていることについては未だ議論の余地があると考えられる。その背景の一つとしては、日本語訳を行う際の「creativity（創造性）」という言葉そのものの持つ文化的な意味の差異も挙げられる。欧米文化では日常的に用いられる用語であるが、わが国の文化に引用した場合、どのような訳語を用いるかによりその意味合いが大きく異なってくる可能性がある。わが国での「世代性」における「創造性」の位置づけについては、今後研究を蓄積する上での重要な課題と言えるだろう。

Ⅲ おわりに

「世代性」は今後、中年期を対象とした研究から、中年期以上の高齢期の研究において展開、蓄積されるべき重要な議題となることが予測される。その背景には、晩婚化により高齢

期になっても親としての役割が終了しない傾向や、長寿化により孫世代・ひ孫世代が誕生しても健康である高齢者の増加に伴う次世代との接触機会の増加（Cheng, 2009）、アクティブエイジングの促進により高齢期になってもボランティア活動など社会活動を行う人の増加（Rowe & Kahn, 1997）などにより、「世代性」が高齢期においても重要な発達課題となっていることが考えられる。高齢者心理学における「世代性」研究は未だ実証的研究の蓄積が殆ど無く、わが国においてはさらにその数は少ない。

本論では「世代性」の概念とその尺度について、提唱したEriksonの定義からわが国における日本語版尺度の内容までを概観した。今後は高齢期の心理社会的発達として実証的研究の蓄積が望まれるが、一方で多義的な要素を持つ「世代性」の概念について、わが国での議論の収斂に向けてさらなる検討が必要であろう。

引用文献

- Bradley, C. L. & Marcia, J. E. 1998 Generativity-stagnation: A five category model. *Journal of Personality*, **66**, 39-64.
- Cheng, S. T. 2009 Generativity in later life: Perceived respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being. *Journal of Gerontology*, **64B**(1), 45-54.
- Erikson, E. H. 1950 Childhood and society. New York: W. W. Norton. (仁科弥生（訳）1977 幼児期と社会 I みすず書房)
- Erikson, E. H. 1968 Life cycle. *The International Encyclopedia of the Social Sciences*, **9**, 286-292.
- Erikson, E. H. 1969 Gandhi's truth: On the origins of militant nonviolence. New York: W. W. Norton. (星野美賀子（訳）1973 ガンディーの真理－戦闘的非暴力の起源－I みすず書房)
- Erikson, E. H. 1982 The life cycle completed. New York: W. W. Norton & Company. (村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）1989 ライフサイクル－その完結－ みすず書房)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. 1986 Vital involvement in old age. New York: W. W. Norton & Company. (朝長正徳・朝長梨枝子（訳）1990 老年期－生き生きしたかわりあい－ みすず書房)
- 堀毛一也 2008 成人期のサステナブルな信念の個人差に関する研究（1）日本社会心理学会第49回大会発表論文集 Pp.202-203.
- Kotre, J. 1984 Outliving the self: Generativity and the interpretation of lives. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press. Pp.10.
- McAdams, D. P., & Aubin, E. S. 1992 A theory of generativity and its assessment through self-report, mebehavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**(6), 1003-1015.
- 丸島令子 2000 中年期の「生殖性 (generativity)」の発達と自己概念との関連性について 教育心理学研究, **48**, 52-62.
- 丸島令子 2005 世代性尺度の作成－世代性の関心と行動モデルの測定－心理臨床学研究, **23**, 422-433.

- 丸島令子・有光興記 2007 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討 心理学研究, **78**(3), 303-309.
- Ochse, R. & Plug, C. 1986 Crosss-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 400-411.
- Peterson & Klohnen, 1995 Psychology and Aging.
- Peterson, B. E., & Klohnen, E. C. 1995 Realization of generativity in two samples of women at midlife. *Psychology and Aging*. **10**, 20-29.
- Peterson, B. E., Smirles, K. A., & Wentworth, P. A. 1997 Generativity and authoritarianism: Research on personality, parenting, and political involvement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**(5), 1202-1216.
- Pratt, M. W., Danso, H. A., Arnold, M. L., Norris, J. E., and Filyer, R. 2001 Adult generativity and the socialization of adolescents: relations to mothers' and Fathers' parenting beliefs, styles, and practices. *Journal of personality*. **69**(1), 89-120.
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M. & Moore, S. M. 1981 From trust on intimacy: A new inventory for examining erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, **10**(6), 525-537.
- Rowe, J. & Kahn, R. 1997 Successful ageing. *The Gerontologist*, **37**(4), 433-440.
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M. & Moore, S. M. 1981 From trust on intimacy: A new inventory for examining erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, **10**(6), 525-537.
- 鑓幹八郎 1984 同一性概念の広がり と 基本的構造 鑓幹八郎・山本力・宮下一博(編) 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版 Pp55-56.
- 佐方哲彦・中西信男 1983 青年期の自我発達に関する研究ーエリクソン心理社会的段階目録 (EPSI) による検討ー 日本教育心理学会第25回総会発表論文集, 154-155.
- Stewart, A. J., Ostrove, J. M., & Helson, R. 2001 Middle Aging in Women: Patterns of Personality Change from the 30s to the 50s. *Journal of Adult Development*, **8**, 23-37.
- Wakefield, J. C. 1990 Is Freud's concept of instinct incoherent?: Resolving Strachey's dilemma. *Psychoanalysis and Contemporary Thought*, **13**, 241-264.
- 柳沢昌一 1985 E. H. エリクソンの心理社会的発達理論における「世代サイクル」の視点 教育学研究, **52**(4), 396-406.